
殺しの国のアリス

* miina *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺しの国のアリス

【コード】

N2284J

【作者名】

minna

【あらすじ】

アリスはうとうとしていると

ふと

白うなぎを見付けました

白うなぎは

いそいそと走っています

血のついたナイフを持って

「ああ急がなくては……!!」
「アリスに殺されてしまう!!」

＋白うさぎを追って＋（前書き）

アリスはうとうとしているよ

ふと

白うさぎを見付けました

白うさぎは

いそいそと走っています

血のついたナイフを持って

「ああ急がなくては…！！
アリスに殺されてしまう！！」

十白いつときを追って十

十白いつときを追って十

ああきつと

これが”運命”なんだわ…

水面に浮かびながら
アリスはそつと呟く

終わるのね
私の人生は

嘆くわけでも
悲しむわけでもない

ただぶかぶか浮かびながら

そっと呟くんだ

さあもうすぐ
君を待つ世界にいくんだ

そう

”逝”くんだ…

「ああ大変だッ」
アリスは退屈でうとうとしていると、そんな声を耳に挟んだ。
少し高い少年の様な声。
慌てているようだ。

誰かしら…

ほんの少し気になったアリスは眠気を振り払い、声の主を探す
風がアリスの髪を揺らす

「あの子ね」

声の主は、

白い髪の可愛らしい少年だった

服装は顔に似合わないチョッキの付いた服を着ている。

普通に見える少年…

ではなかった。

「あの子には人間の”耳”がついていないわ！」

そう、驚く事に少年には人間の耳がついていなかったんだ。
ついているのは

”白うさぎの耳”

頭の上に生えるようにしてついていた。

長い長い耳がね。

不思議な物を見るように走っていく少年を見つめるアリス。

少年は次第に大樹へと直進していった。躊躇いもなくただ焦りながら。

「あのままだと樹にぶつかっちゃう！教えてあげなくちゃ」
立ち上がると、アリスは少年の方へと走っていった。

「その男の子ー！」

大きな声で叫ぶアリス。

それに気付いたのか少年は走りながらアリスの方を見た。

疲れているような表情はアリスの姿を捉えた途端、
みるみる内に驚愕の表情へと変わっていった。

まるで殺人鬼を見るように

驚きながら少年は叫ぶ

「アリスが殺しにくるッ！！！」

なんのことかしら…？

アリスは、その言葉の意味を真っ直ぐに受け止められず、少し悩んでいた。

”殺人鬼” ？

私が？

そうこうしている内に、白うさぎは大樹に激突…
はせずに、まるで透き通っているものを通り抜けた様に
すっと向こう側へ行ってしまった。

「あの大樹にぶつからなかったわ！！やだ…どうなってるの…？」

アリスは呟きながら大樹に触れた、
と思ったら吸い込まれるように大樹の中へ”落ちて”いったんだ。

十見知らぬ森で十

さあアリス

一緒に狂おうか

狂い踊り殺し

さあアリス

殺そうか

次こそお前が・・・

どてんっ

凄い音と衝撃が空間となっている樹の中に響いた。
横には血のついたナイフが柵の上に無防備に置かれていた。

「やだ…なにこれっ」
ナイフが視界に入りすぐさま離れるようにして立ち上がった。
足元に何かあるみたいだが暗くて良く見えない。
アリスは不気味な感覚に襲われ、
本能が教える通りにたったひとつの扉のノブに手を伸ばした。

「ここ…どこ…?」

扉を開くと見知らぬ森にいた。

右も左も森森森…。

後ろを振り向くが、さっきまでいた大樹が無くなっている。

見知らぬ土地

見知らぬ世界

ここは…どこ？

「…こんな所でぼーっとしてても仕方ないわ！
まずは人を探してここが何処なのかを聞かなくっちゃ」
自分に言い聞かせて立ち上がるアリス。
ちよつとずつ歩きながら、深い森へ吸い込まれていった。

「まったく人がいないわ！」
やや憤慨気味にアリスは言った
皆私を避けてるのかしら、などと自虐的な考えも現れ始めている。
深い深い森の中。
始めに出会うのはだあれ？

少し歩いたところに、小さなログハウスを見つけた。
扉は約3？ちよつと。
アリスの身長は150？ちよつとだから、絶対に入れないよね。
そこでアリスはログハウスの隣にある自分の背丈のテーブルに目を
やった。
テーブルの上にはちよこんとイチゴジャムが詰まった
可愛らしいビンが置かれていた。

ビンの側面には、パッケージではなく紙が貼られていた。

「私を食べて」

「そんなに食べて欲しいのかしら…」

ちよつとだけお腹を空かしているアリスは、ビンを手にとって蓋をポンツと開けた。

開けた瞬間に素晴らしい苺の匂いと甘いジャムの香りがアリスの周りでダンスをし始める。

「まあ…そんなに私に食べて欲しいのね！いいわ、食べてあげる！」

アリスはペロリとジャムを完食してしまった。

お腹がいっぱいになったのか、アリスはふうっと息を吐き、テーブルの横に座り込んでしまった。

「あら…テーブルがどんどん大きくなっていくわ!」

アリスはお腹をぽんつと叩きながら徐々に大きくなっていくテーブルを見上げた。

そう、本人にはそう見えるだけ

本当はテーブルが大きくなっている訳じゃなく、アリスが小さくなっているんだ。

徐々に徐々に…。

とうとうアリスは2?くらいの身長に縮んでしまった。

アリスはログハウスの方に目をやると、

なんと家が自分の身長に合ったサイズになってるではないか。

すぐさま立ち上がり、ログハウスのドアノブに手を伸ばす。

カチャリ…

意外とすんなり開いてしまった

「ふ…不法侵入なんかじゃないからねっ！」
誰かに言うようにしてアリスは扉をくぐった。

十真っ黒なネズミ十

だあれきみは

ああアリス

またさつりくを

くりかえすのかい？

もうおやめ

きつとあなたは

こうかいするから・・・

ログハウスの中は暗かった。

だが何も見えない、と言う訳ではなさそうだ。

じっと目を凝らしていれば、徐々に目が暗闇に慣れてくる。

アリスは扉を閉めながら目が慣れるのを待った。

ギギイイイ…パタンッ

重い扉は音と共に暗闇を封じ込めた。アリスはログハウスで”たった一人”

「やっと見えてきたわ！どこかにロウソクはないのかしら…」
眩きながらアリスは前へと前進する。
暗い闇に一人で立ち向かう。

ガタッ

「…誰かそこにいるの？」
「…」
妙だ。

アリスは特に驚きもせず、”誰”かがそこにいることを前から知っているみたいだ。
でもアリスはこの世界を知らないから、自分自身を不思議に思ったんだね。

「いるよ……。」

暗闇から返事が返ってきた。
アリスは何故かほっとする。
幽霊であれ化け物であれ、誰もいないよりはマシだった。
「そんなところにいないで、私の前に出てきてちょうだいな」
暗闇へ声を掛けるアリス。

まるで独り言を言っているみたいだ。

「殺さないのであれば…」

「殺す？誰が？誰を？」

三つの質問を同時に話すアリス

普通の人だったら少しうざったいと思ってしまう。

「ああ！きみはおぼえていないんだね！！」

ガタンッ

嬉しそうな声は椅子（に座っていたと思う）から立ち上がり、アリスに走り寄った。

アリスの目の前に立っているのは暗闇に溶け込んでいる真っ暗なネズミ。

しかし幸いなことに、ネズミは

片手に火のついたロウソクの刺さった燭台を持っていた。その光でアリスの顔も、暗闇のネズミの顔も見えるのだ。

「やっと僕らの大好きなアリスになったんだ!!」

今にもアリスに飛び付きそうなネズミは、きらきらと目を輝かせている。

アリスは何の事が全然分からなかった。

「何を言ってるの…？私達は初対面でしょう？」

アリスはネズミに向けて言い放った。

ネズミはその言葉を聞いて、物凄く嬉しそうな顔を作った。

「記憶もないんだねっ!？」

「…何がなんなの？全く分からないわ…」
アリスは混乱しながら、ネズミの案内でログハウスの中を歩く。
真っ暗な中の小さな赤い光。
何処かで見えた記憶がある。
さてなんだっけ？

「…ねえネズミさん、聞いても良いかしら？」
恐る恐るアリスはネズミに尋ねた。
「なんだい、アリス」

「貴方は、なぜ私を知っているの？」

「ぼくらは”君”の事は知らないよ。ぼくらが知っているのは”アリス”だけさ」
言っている意味が分からなかった。私を知らないのに私を知っている？
矛盾が広がる。

「…ねえネズミさん。この世界はどこなの？」
「この世界は………」
ぴたっとネズミの足が止まる。
アリスはぶつかりそうになり、慌てて足を止める。
ネズミは黙っている。

「ネズミさん？」

アリスはもう一度聞こうと口を開いた。

それと同時にネズミは切った言葉の次の台詞を言う。

「君の世界さ、”アリス”」

「私の世界…？」

「一体何のこと？と言いたげな目でネズミを見つめ返す。
可愛らしいネズミは再び同じ台詞を口にする。

「君の世界、だよ」

「今の君には関係ない世界だよ。今の君は希望に満ちている。だから僕らを殺さない」

「だ、だから良く分からないわ！！なんで”今”の私なのっ！？」
アリスは大混乱している。

何がなんなのか分からない。

”今”の私、つまり”昔”の私もあるのだろうか？

「…そんなに”昔”と”世界”が知りたいのかい？」

ネズミはゆらつとした灯火に照らされた顔を少し歪ました。
笑顔はもう無い。

真剣で、恐ろしい顔。

「分かれば元の世界に帰れるのかしら？」

平常心を保ちつつ応答するアリス。内心は凄く怖いのだ。

ネズミは元の表情に戻り、にこりと笑いかける。

「君の言う”元の世界”は分からないけれど、”昔のアリス”について聞いてみるといいよ」

「”昔のアリス”…？」

私は昔…ここに…きた？

「貴方が昔の私を教えてくださいませんかしら？」
丁寧な口調でネズミを問う。
ネズミは首を横に振る。

「僕の口からは言えないよ。女王さまに首をはねられちゃっからね」
「じゃあ誰に聞けばいいの？」
「…誘惑の猫…。あいつを尋ねれば教えてくれる。
いいかいアリス、自分自身を忘れたらダメだからね」
ネズミは悲しそうな瞳でアリスを見つめた。

この顔…何処かで…見た？
ううん、きつと気のせいだわ。

そう…気のせい…。
死にかけて思い込みが激しくなったのね。
…え？死にかけて？
何のこと？
…ああもうっ！！
訳が分からないわ！
とにかく、”誘惑の猫”を尋ねなくちゃ！

アリスはネズミの言ったことにはあまり耳を傾けずに、軽く会釈をしてログハウスを出た。

十忠告のイモムシ十

君は騙される

また繰り返す

猫を見てはいけないよ

死人を見てはいけないよ

狂ってしまえ
狂ってしまえ
狂ってしまえ

きつと皆は望まない

死にかけアリスは望まない・・・

「あつちだわ！」

聞こえた方に走っていく。もしかしたら”誘惑の猫”かもしれぬ！
そんな希望を胸に猛ダツシュで声の主へ会いに行く。

出会ったのは”誘惑の猫”では無かった。

とても大きな葉っぱの上に座っているととても大きなイモムシだった。
プカプカとパイプを揺らしながら寝たり起きたりを繰り返している。
アリスは多少ガツカリしながらイモムシに話し掛ける。

「ごきげんよう、ねえ貴方。”誘惑の猫”は何処に居るかご存知？」
丁寧な口調で尋ねるアリス。
あまりいい加減に言っただ怒らせてしまっただはまた他の”人”を探さなければならぬ。
慎重に慎重に…。

イモムシはトロンとした瞼を重々しく開き、アリスを視界に捉えた。
「ああアリス…君はまた繰り返すのかい…？」
アリスはイモムシが何を言っているのか全く分からなかった。
さつきもそうだ。
それに自分は名乗ってもいないのにアリスの名前を知っている。
本当に摩訶不思議だ。

「良く分からないけれど…もう一度言っわ。貴方は”誘惑の猫”を
ご存知？」

多少イラつきながら丁寧な口調で質問を繰り返した。

イモムシは”誘惑の猫”と聞いた瞬間に顔を曇らせた。
そして哀れむようにアリスを見つめる。

「知ってるさ。なんだい、また尋ねるのかい？」

”また”？…初めてのはずなのだけれど…。

訳が分からないままアリスはイモムシを見つめ返した。

「…またとか良く分からないけれど、とにかく尋ねなきゃいけないの」

「おやめアリス！アイツを尋ねてはならないのだよっ！！」

イモムシはいきなり大きな声を出した。アリスはビクツと震え、目を見開いている。

「な、なに…なんで尋ねちゃならないの…？」

少々怯えながら聞き返すアリス

イモムシはこほんっと咳を一回して、元の音量に戻して再び話す。

「ヤツは君を歪ませるよ。だから尋ねてはダメだ」

「歪ませる…？何の為に…？」

「……………」

アリスの質問にはイモムシは答えようとしなかった。

不思議に思ったがアリスも聞いちゃいけないのだと思い、聞く事を止めた。

「…君には”キオク”がないんだね…」

「なんの記憶…:…?」

アリスは再び質問をする。

「これをお食べ」

質問は無視してイモムシは大きなキノコを差し出した。
椎茸みたいなキノコだ。

香りもまるやか。

「毒キノコじゃないの?」

キノコを受け取り食べる事を少し躊躇った。

イモムシは笑いながら答える。

「この世界には毒キノコなんてないんだよ」

アリスは取り敢えず食べることにした。

イモムシは悪くなさそうだと思ったからだね。
ぱくっ

ゆっくり口に含みもぐもぐと嚙んでいく。

意外に美味しかった。

少し土の香りがしたが、新鮮という感じがして嫌ではなかったからだ。

ごっくん…

アリスは飲み込むと、イモムシが徐々に小さくなっているのが分かった。

「やだ、イモムシさん！貴方小さくなっていくわよ！！」

アリスの言葉にイモムシは笑って答えた。

「君が元の背丈に戻っているだけさ。わたしや変わっちゃいないよ」
そしてアリスは元の背丈に戻ったのだ。

イモムシはしゃがんで見ないと何の虫か判別できない。

小さな声でイモムシは助言した

「三月ウサギを尋ねなさいな。きっと力になってくれるだろう」
アリスは少し混乱しながらイモムシに返事をした。

「分かったわ。誘惑の猫はどうしたら良いかしら？」

その質問にはイモムシもきちんと答えたのさ。

「三月ウサギに尋ねてみなさい。わたしより良い意見をくれるはずさ」

アリスは一言お礼を言い、
イモムシが教えてくれた通りの道で森を抜けた。
イモムシはアリスに聞こえないように小さく呟いた。
「今度こそチエシヤ猫に惑わされてはいけないよ……」

十森隣の小さな家十

物知りウサギの住むところ

昔は血で染まっていた

さあさあ今はどうだろう

アリスは胸踊らせて

会いに行く

また血で染めようかしら？

「…誘惑の猫を尋ねるとか三月ウサギを尋ねるとか…皆して私を騙してるのかしら！」

憤慨気味にアリスは言うが、全然騙されている気にはなっていないかった。

何故なら「ネズミ」も今度こそ大丈夫だろう、

と言う感覚で誘惑の猫を尋ねると言ったのだし…。

イモムシに至っては、誘惑の猫に合うのは絶対に

ダメだから判断を三月ウサギに任せる、

と言った具合で尋ねると言ったのだろう。

アリスは取り敢えずイモムシの言った通りに三月ウサギを尋ねてみる。

きつと物知りに違いない！

アリスは森を出ると、すぐ近くに小さな家が建っていることに気が付いた。

イモムシ曰く、三月ウサギの家は赤い屋根の小さな家と言っていた。アリスが近くの家を見る分にはイモムシが言っていた家とそっくりだった。

躊躇いもせずに、アリスは家へと歩いていった。

コンコンッ

扉を叩く音が静かな草原に広がった。

ノックをしたのに誰かが出てくる気配が無かった。

アリスは試しに扉を開けてみる

すると、なんとすんなり開いてしまったではないか。少し躊躇ったが、アリスは家の中へと入っていった。

十物知りウサギ十

知識を分けて欲しいって？

殺さないなら教えよう

また来たのか？

え…？
血を分けて欲しいって？

ああまたか

結局こうなるのか・・・

「誰かいませんか…?」

恐る恐る入り、小さな声で問いかけるアリス。

ネズミの様に、また椅子か何かに腰をかけているのだろうか…。

そんな事を考えながら、アリスは玄関で呼ぶのを止めて完全に中に入った。

ギィィィ…パタンツ

「ここ空き家じゃないの!？」

家の中を回りながらアリスは呟いた。

リビング、寝室、キッチン、風呂場、トイレ…

全て見て回ったが、人影すら無かったんだ。

今アリスは、リビングのソファに座り込んで

カーテンの掛かったガラス窓を見ている。

「……三月ウサギなんているのかしら……」

徐々にイモムシの話がデタラメに思えてきた。

やっぱり誘惑の猫を探さなくちゃ……と思った時、

ティーカップをテーブルに置く音がベランダから聞こえた。

カチャッ

「誰かいるわっ」

アリスは、音を聞きぱあっと表情を明るくさせた。

そしてすぐに立ち上がり、音のしたベランダへ駆け寄った。

カーテンを開け、ガラス窓を開けて外へ出る。
左を見ると、茶色いウサギがティーカップを丁寧にテーブルに並べていた。
カチャカチャン…
そして口を開く

「やあアリス。あまり無理をしてはいけないな」

意味不明な言葉をウサギはアリスに投げ掛けた。
にこつと優しく微笑んでいる。

「私は無理なんかしてないわ！ねえ三月ウサギさん、
貴方私だから何処へ行けば良いかご存知？」
人にものを尋ねる時は丁寧に。
ずっとこれを心掛けている。

三月ウサギは笑顔から曇った表情にゆっくりと変えていった。

「…教えて欲しいのか？」

「ええ、とつても」

真剣な眼差しでアリスは答える

その表情を見て、三月ウサギは少し困ってしまった。

「また始めるのか？キミは誘惑の猫に会って何をするんだ？」

アリスは”また始める”という質問には答えられないから、
”何をする”の質問を答えた。

「誘惑の猫に会って元の世界に戻してもらおうのよ」

「そういう願いか。なら誘惑の猫より白ウサギを尋ねた方が早いだろう。」

ただ…会うことは100分の1だから…無理だろうな」

三月ウサギはうーんと考え込んでしまった。

その際ブツブツと独り言を言いながらアリスをチラ見する。

「…自分自身を見失わないのであれば、

やはり誘惑の猫に出会って真実を知るべきなのだろうな」

” 真実 ”

？

「ああ…そろそろ帽子屋とヤマネがお茶をしに来る…。そうだから。」

誘惑の猫に出会ったらもう一度ここへ戻っておいで、次の選択肢をキミに与えるから」

優しく話す三月ウサギ。

アリスは凄く懐かしく思えた。

同時に悲しくもなってきた。

「誘惑の猫は一体何処にいるのかしら？」

アリスは一応場所を聞くことにした。

さつきも居場所が分からず放浪する羽目になったからだ。

三月ウサギは微笑んだ。

「キミが会いたいと思えばヤツは現れるよ」

「まずは深い森で猫を思うと出会いやすくなるだろう」
ずっと微笑んでいる。

アリスは変な感覚を覚えた。

私…この顔…壊したこと
ある？

十ふたたたび森へ十

アリスは戻る

最果てから戻る

色々思っ
て

真実を知って

壊れて

消える

そしてまた

アリスは戻る

この場所に・・・

「誘惑の猫：ホントに出てくるのかしら…」

不気味な森に再びやってきたアリスは、木々の枝に目をやったり、地面を見たりとキョロキョロしていた。

三月ウサギ曰く、誘惑の猫は背景に成り済ますらしい。

ただ、見付けやすい欠点があると聞かされた。

それは…

「口なんて見えないわ!!」

怒りながらアリスは前に進む。

どこを見ても口なんて無かったんだ。

そりゃそうだよな、普通口だけが浮いてたらおかしいもの。
でもアリスはそれが”普通”だと思っ込んでるんだ。

何故だかわかるかい？

「はあ…ないわ…」

とうとう疲れてしまい、ぺたんと地べたに座り込んでしまった。

「足がもう動かないわ…」

アリスはまるで家の中でくつろいでいるような体勢で座っている。しかし、座りつつも周りをキョロキョロしながら誘惑の猫を探している。

暗い暗い森の中

空は真っ赤

まるで青い空が真っ赤な血で染まったみたい
アリスはにこっと空に微笑む。

「…じゃ」

十 誘惑の猫十

じゃんじゃんじゃんじゃん

ボクのアリス

にゃんにゃんにゃんにゃ

ボクのマリオネット

にゃんにゃんにゃんにゃ

ああ狂おしい
ああ愛おしい

ボクのアリス

一緒に

にやんにやにやにや . . .

「今”にや”って聞こえた気がしたんだけど…」
気のせいかしら、と思いながらアリスは視線を隣の大きな樹へ移した。

それと同時に大樹の枝に、にやあっと笑う口が”浮いている”事に気が付いた。

ここから、アリスの齒車は…

「居たわっ！！誘惑の猫さん！！」

アリスは立ち上がり、樹に浮いている口を指差した。

指を指された口は、ゆらつと揺れ喋り始めた。

「ボクに何の用？」

そして徐々に姿を表し始める。

ボロボロの茶色服、ボサボサの茶色髪、ギラツとした茶色い瞳、
そして頭から生える茶色い猫の耳。

お尻からは可愛い茶色い尻尾が生えていた。

納得だわ、だから”猫”なのね！

「私元の世界に帰りたいのだけど…帰り方を教えて下さらない？」
アリスはいつも通りに丁寧な口調で質問する。

猫はにやりと笑い、枝から落ち、華麗に着地した。

「良いよ、教えてあげよう…」

ふふっ…

惨劇への第一歩…ふふっ

「本当っ!?!」

ぱあっと表情を明るくさせるアリス。猫は笑う。

「もちろんだよ、では帰り方を教えてあげよう」

猫の口はずっと、にやあっと笑っている。

「キミは入り口の大樹でナイフを見なかったかい？」
猫は笑う。

「え…ええ、見たわ」

不気味な物を思い出し、アリスは少し気持ち悪くなる。

「それを取ってきなさい」
猫は笑う。

「それでこの世界の住人を皆殺しするんだよ、ふふっ」

誘惑の猫（4 / 7）

揺らいだ。

沢山の感情が揺らいだ。

不思議な感覚。

これ、私覚えてる。

ダメだ、また後悔するわ。

なんでそんな事が分かるの？

違う、分かるんじゃない。

”分かってる”んだ。

ああダメ、感情が無くなる。

ヤダヤダ…もうあんな思いはしたくないわっ！！

「大丈夫かい、アリス」

少年猫はアリスの頭をぽんつと撫でる。

アリスはその手を振り払い、表情は怒りと動揺が入り混ざっていた。

「入り口の大樹を出してあげるからそんな顔をするのはおよし」

違う、いらぬ。

ナイフなんていらぬ。

ヤダヤダ、大樹を

デ

ダ ナ

サ

イ

ピンツ

猫が人差し指を上に向けた途端、アリスの後ろに大樹が現れた。
さあ狂ってしまえ。

「ほら、”キミ”のナイフを取ってきて皆殺しをするんだ」
猫は促すようにアリスに言った

「い」

「い？」

アリスの小さな言葉に猫は困った顔をする。

「嫌に決まってるでしょ!?!」

やっとの事でアリスは大きな声を出せたんだ。

はあはあと息を切らして、今にも泣きそうだった。

「なんで私が皆殺しなんかしなくちゃならないのかしらっ!?!」

怒りながら話すアリス。

猫は困った顔で答えを出す。

「なら殺さなくても良いよ、

ナイフを護身用を持っているだけでも構わないよ」

猫は少しだけしよんぼりしながら言う。

「…それで、帰れるの?」

アリスは不安げな表情で猫を見つめる。

猫はにやあつと笑って、こくつと頷いた。

…殺さないなら、別にナイフを持っていても構わないわよね。

「分かったわ、ナイフを取ってくる！」
アリスの決断に何故か猫は笑っていた。

「では行ってらっしゃい」

猫はそれを言うと、再び姿を消した（口は見えるけど）
アリスは後ろを向き、すぐそばにある大樹へ向かって歩いていった。

「…アリス、一緒に狂おうじゃないか…クスクス」

奇妙な台詞が聞こえたが、アリスはそれを振り払った。
今は帰る事だけを考えるの！

そう自分に言い聞かせながら、アリスは大樹の中へ吸い込まれていった。

十白いときを追って十（後書き）

見てくださってありがとうございます・・・

オマ、これからが殺しの国の幕開けよ・・・（じゃ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2284j/>

殺しの国のアリス

2010年10月28日04時25分発行